

2018. 10. 11 (木)

民俗学の話

島村 恭 則

子どもの頃のわたし

授業で「現代民俗学 A・B」という科目を担当していますが、今日の話は、なぜ民俗学をわたしが始めたのかというところから始めて、15分ぐらいお話したいと思います。

人が亡くなったときのお葬式は、現在、日本ではセレモニーホールなど、お葬式をやる会館で行なっていますね。ところが、いまから40年ぐらい前までは、町の中のふつうの家で、自宅でお葬式をやっていました。

どのようにやるかという、玄関のところ、白黒の幕が張られ、花輪がたくさん並べられます。それで、小学校から家までの帰り道、角を曲がると視界の中に花輪が見えて、お葬式をやっている家が突然現れるわけです。1カ月に2回か3回はありました。

今でも人はたくさん亡くなっています。病院で亡くなる人も多いですが、要するに人が亡くなっている状態はたくさんあるはずで、しかし、家でお葬式をやらないので、人がなくなっていることがわかりにくい。かつては家でお葬式をやるので、人が亡くなったことがすぐにわかりました。

それから、葬式があると電柱に、こういう指指しマークがあって、そこに「島村家」と書いてある。お葬式の家はあちらです、とい

う道案内です。これが貼ってありました。それから町内の掲示板にも、周りに黒く、このように枠を作って、中に「誰々さんが亡くなりました。何歳でした、お葬式はいつあります」というものも貼られていました。

小学生だったわたしは、それが目に入ると、ものすごく怖いわけです。学校の行き帰り、その前を通れないので、遠回りをしたり、あるいはそれが無理なら、息を止めて全速力で通過したりするわけです。それは高校生ぐらいまで続き、大学受験の直前までそうでした。その先のことはのちほど話します。

もう一つ、幼稚園に通っていたときのことです。カトリックの幼稚園で、お昼ご飯の前に1人ずつマリア様の前に行き、順番にお祈りするのです。毎日していたので、お祈りという行為そのものと、神様がいらっしゃるということとはわかるのですが、キリスト教とは何なのかは、幼児なので当然ですが、わかっていませんでした。

それで、お祈りのやり方だけはわかるので、どうなったかという、わたしは、幼稚園の門を出ると、町の中にあるお地蔵さんやお稲荷さん（つまり神として祀られているキツネのことです）など、祀られているいろいろな神仏にお祈りをするようになってしまったのです。あとになって、このことを「お祈

り癖」と名付けましたが、何にでもお祈りしないと気がすまなくなりました。そのうち、お祈りをしないと、向こうから何か言ってくるような感じがして、それが高校生までずっと続きました。

民俗学との出会い

もっとも、「お祈り癖」があることは、外には見せないの、外から見たらふつうの人ですが、実はいろいろな神様がわたしに何か言ってくるわけです。また、葬式がものすごく怖かった。それで、わたしは、自分は頭がおかしいのではないかと困っていたのですが、高校2年生のとき、学校帰りに、渋谷駅の前にある紀伊國屋書店でいろいろな本を見ていたときに、社会学の本は抽象的なことしか書いていないので全然面白くありませんでしたが、あるジャンルの本を見ると、自分が知りたかったことが書いてあったのです。つまり、その辺にあるお地蔵さんやお稲荷さんといったものは、実は民間信仰の神仏であり、それにはそれなりの意味があるということが書いてあったのです。

もう一つよかったことは、なぜお葬式が怖いのかもそこに書いてあったことです。わたしが恐れていたのは、「死のケガレ」というものであることがわかりました。すなわち、ケガレには「穢れ」、すなわち汚いという意味もありますが、根本的には、生命力が失われている状態、死の状態がケガレである。そして、その「死のケガレ」は、伝染する。死者から、ケガレというものが発生していて、それに伝染すると自分も死に引きずり込まれる。長い間、人びとはそのように考えてきた、ということがそこに書かれていました。

これを読んで、まさにわたしの中にあった感覚が言い当てられていると思いました。言葉にならなかった感覚に言葉が与えられた。ケガレという言葉が与えられ、非常にすっきりした気分になったことを覚えています。

さて、お地蔵さんやお稲荷さん、ケガレといったものは、つまり民間信仰という名前できることができるのですが、この民間信仰について扱っている学問が民俗学です。わたしを引きつけた本というのは、この民俗学の本だったので。

それで、それ以後、その本屋さんの民俗学のコーナーに毎日のように行って、買えるものは買って、次から次へと読んでいきました。すると面白いことに、お葬式が怖くなくなり、キツネなども声をかけてこなくなりました。正体のよくわからない対象について、それが一体何なのかがわかるようになると、もう怖くなくなる。そういうことが起きました。正体がわからないから怖いのであって、相手が何者かがわかると怖くなくなるのです。

こうやって、わたしは民俗学の読者になり、さらに、高校生でしたが、民俗学の概論書や事典を買って、民俗学の勉強を始めました。受験勉強もしなければならぬのですが、民俗学のほうが実は大事なので、学校の勉強や受験勉強はできるだけ要領よくやって、とにかく民俗学の本ばかり読む、それから民俗学に関わる場所に旅行するという生活をしていました。高校3年生のときに遠野にも行きました。その後、大学に入り、大学院にも行きましたが、そのときの話は別の機会にするとして、ここでは、わたしが好きになった民俗学という学問がどのような学問なのかに話を進めます。

民俗学とはどのような学問か

日本の民俗学にとって、1910年という年は、重要な年です。いまから108年前、1910年です。1910年はどういう年だったかということ、明治維新が1868年ですから、それから42年がたっています。梅田から宝塚まで阪急電車ができた年です。神戸線はまだできていません。神戸線の開通は1920年ですから、10年後です。今津線ができたのは1921年なので、もっと後です。

1910年というのは、元号でいうと明治43年で、明治時代の終わりの頃です。明治維新から半世紀がたって近代化がかなり進んできた時期です。阪急電車ができたのもその現れですが、もう一つ、朝鮮半島を植民地化したのもこの1910年です。この1910年に、柳田国男が『遠野物語』という本を出版しました。これは、岩手県の遠野盆地の雪女や天狗などのいろいろな伝説を集めた本です。タイトルに「物語」とありますが、別に小説とかではなくて、伝わっている話、遠野に伝承されてきた物語を集めた本です。

その本の最初のところに、「願わくはこれを語りて平地人を戦慄（せんりつ）せしめよ」と書いてあります。どういう意味かということ、ここに書いてある内容を語って、平地に住んでいる人——山や田舎ではなくて都会に住んでいる人——を戦慄せしめよ、つまり驚かせよ、ということです。

この当時、日本は近代化をずっと進めてきていますから、天狗や妖怪や民間信仰のようなものは、取るに足らない話で、合理的に割り切れないので、否定する。しかし、実は日本の各地に、ということは、日本に暮らす人

びとの中に、そうしたものは根強く残っているから、そういうものをきちんと認識させようというのが、「これを語りて平地人を戦慄せしめよ」の意味するところです。

ところで、民俗学は日本で生まれた学問だと思っている人がときどきいますが、民俗学が始まったのはドイツです。民俗学が生まれた18世紀から19世紀にかけて、とくに、18世紀は啓蒙（けいもう）主義の時代で、フランスやイギリスでは合理的な思考、自然科学が発達し、合理的に割り切れないものをみんな否定していきました。

さて、このような啓蒙主義的な考え方は、ドイツにも広がってきていましたが、その中から啓蒙主義に真っ向から対抗する人物が現れました。それが、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーという思想家です。ヘルダーは、啓蒙主義的な合理性では割り切れない、伝統的なものや土着の文化を大事にしなければいけないのではないかと考えました。

それで、彼は何をやったかということ、歌、民謡を集めだしました。ドイツの人びとの間で、口伝えで伝わっている民謡を集めました。また、ドイツだけでなく、ヨーロッパ各地の歌も集めました。そして、彼の民謡収集運動は、ヨーロッパ各地、とくにヨーロッパ東部やスカンジナビア半島などの小さな国々に受け入れられ、それぞれの地で民謡収集運動がさかんになりました。

とくにさかんだったのが、バルト三国——エストニア、ラトビア、リトアニアです。ロシアとドイツという両大国に挟まれた位置にあるこれらの小国は、自分たちの民謡を集め、研究することで、ロシアやドイツとは異なる、自分たちのアイデンティティをそこに発見していきました。また、フィンランドで

も、カレワラという、口頭で伝えられてきた叙事詩の採集が行なわれました。フィンランドはスウェーデンとロシアに挟まれているので、自分たちはロシアなのか、スウェーデンなのか、自分たちは何者なのか、というアイデンティティに関わる問題を抱えていましたが、そのような中で、「自分たちの歌」としてのカレワラを見つけることで、フィンランドのアイデンティティというものを発見していったのです。

ヘルダーの次に登場したのが、『グリム童話』で有名なグリム兄弟です。グリム兄弟とは、ヤーコブ・グリムとヴィルヘルム・グリムの兄弟ですが、実は彼らは、ヘルダーとともに民俗学の祖といわれています。ヘルダーは歌を集めました。グリム兄弟は、お話を集めます。合理的な思考枠組みのもとでは切り捨てられてしまうようなお話、昔話の中に大事なことがあるのではないかと考えて、民話を集めたのです。それをまとめたものが、いわゆる『グリム童話』です。

歌、それからお話、その次は何がテーマになったかという、今度は、先ほどお話した民間信仰の世界です。民間信仰の対象となる神や精霊が研究されるようになりました。歌、物語、それから民間信仰と、こういう順番で、民俗学の研究対象が拡大し、同時にヨーロッパだけでなく、アメリカ、あるいはアジア・アフリカにまで民俗学が広がっていききました。

民俗学が発達した国は、大きな国ではなく小さい国、強い国ではなく弱い国、近代化が進んだ国ではなくどちらかというと遅れた国です。民俗学発祥の地、ドイツは、当時、フランスに比べると遅れていました。そして、ドイツに続いて、バルト三国、フィンラン

ド、ノルウェー、あるいは東ヨーロッパの小さな国々で民俗学がさかんになりました。

なお、同じヨーロッパでも、イギリスやフランスでは民俗学は研究されなかったのかというと、研究はされました。ただ、イギリスの場合、イングランドではなく、ウェールズやスコットランドにおいて民俗学がさかに行なわれました。フランスも、パリではなく、ブルターニュ地方でとくに民俗学が発達しました。それから、アイルランドも民俗学がさかんです。

ここからわかることは、民俗学は、中心部ではなく周辺部で、支配する側ではなく支配される側で、さかんに研究されてきたということです。

日本も民俗学が非常にさかんに研究されてきた国です。日本は、帝国主義でアジアを植民地支配したという歴史を持っていますが、一方で、明治時代には、日本は欧米列強に支配されてしまうのではないかという恐怖がものすごくありました。そうした感覚を背景にさかんになったのが民俗学です。

つまりかつてのドイツやフィンランドやバルト三国のりびと同じような発想で、小さな者たちが、大きくて強い者によって支配されそうになったときに、自分たちの持っている小さいもの、取るに足らないとされているもの、たとえば、歌やお話、民間信仰、その他いろいろ、を研究して、そこに自分たちとは何者かを考える材料を見出そうとしたわけです。

強い立場にある者が、自分たちの価値観や論理を「普遍的」なものだとして押しつけてくる、ということは現代でもあちこちで見られますね。そうしたものに對抗する、もう一つの価値観や考え方を見つけ出し、それに言

葉を与えていこうとする学問が民俗学なので
す。わたしは、民俗学のこの考え方がとても
気に入る、いままでずっと研究してきました
た。もっと詳しい話は、「現代民俗学」の授

業で話していますので、機会があれば、ぜひ
受講してみてください。

(社会学部教授)